

# デカルト形而上学の方法としての「省察meditatio」について、 あるいは、形而上学は方法をもたないこと

村上 勝三

## はじめに

形而上学を構築して行く場合にどのような途を辿るのか。もし形而上学が第一哲学として解され、この形而上学に基づいて学問的知識の形成が始まるのなら、その途は通常理解されている「論証demonstratio」ないし「証明probatio」を方法とすることはないのであろう。なぜならば「論証」にしろ、「証明」にしろ予めそれらが成立するための規則を必要とするからである。もちろん、論証の規則を先立って形而上学を組み上げるという場合もある。デカルトは形而上学を、通常の「論証」を先立てるのではない仕方で見出して行ったと考えられる。そのデカルト形而上学の「方法methodus」、つまり、道を追うことを「省察meditatio」という概念を主軸に据えながら解明する。

本論に入る前にもう一つの軸を形成する「マテーシス」という概念について少し説明を加えておく。この「マテーシスmathesis」概念は17世紀哲学における方法論を問う場合に「数学mathematica」、「幾何学geometria」などととも大事な概念になる。この表現は通常「数学」と訳されるが、そう訳すとmathematica, geometriaなどと混同をきたすことになる。それゆえ本論では「マテーシス」とカタカナのままにしておくことにする。17世紀だけではなく伝統的に哲学ないし形而上学の方法論として数学は大きな役割を果たしてきた。とりわけ17世紀ではこのことが顕著である。「哲学ないし形而上学」と記したが「哲学」と「形而上学」とはどのように違うのか。今は、17世紀について概して言えば、「哲学philosophia」という表現で学問の全体が示され、物理学=自然学physica/philosophia naturalisも哲学の大事な部門であったということ、それに対して「形而上学metaphysica」は哲学のうちの哲学、言い換えれば「第一哲学prima philosophia」という位置にあったということだけを指摘しておく。もちろん、ここには大きな問題があり「存在論ontologia」という語の17世紀における導入という事実も「形而上学」概念の解明には重要である。しかし、ここではこの点について論じない。導入として、デカルトの「方法」に対するライプニッツの批判の一部を取り上げ、「論証」と「省察」の対比を取り出すことにする。

## 第一章 マテーシス

### 第一節 デカルトの「方法」に対するライプニッツの批判

デカルトは1637年に出版された『方法序説』の「第二部」において「四つの準則préceptes」(AT. VI, pp. 18-19)を提示している。要点だけを記せば次のようになる。第一は、早まって判断を下すことと先入見を避け、明晰判明に精神に浮かび上がるものだけに注目すること。第二は、問題をできるだけ小部分に分割すること。第三は、もっとも単純なものから少しずつ複雑なものまで、順序正しく考えを導くこと。その際に、問題を構成する事物の間にもともとの順序が見出されない場合には、順序を仮定しながら進むこと。第四に、完全な枚挙を行い何も見落とさなかったと確認すること。これらは難しい問題を順序よく解いて行くための手引きになる。

1666年に若いライプニッツは、デカルトが最初に開発し、後の人々が「準則præcepta」のうちの一つとした「分析analysis」についての賛辞を書いている<sup>1</sup>。この限りではデカルトの「方法」に対して、ライプニッツは或る程度肯定的である。しかし、その二年後と推定されている断片においてライプニッツはデカルトの「方法」を不完全で

あると看做す。ライプニッツによるデカルトの方法への批判点を二点に纏めれば次のようになる。

(1) デカルトの四つの「準則」のうち第一のものに相当する明証性の規則についてライプニッツは「無数の仕方で欺く」とする<sup>2</sup>。

(2) デカルトが方法として用いる「疑いdubitatio」は間違いか、有害か、役に立たないかである<sup>3</sup>。

ライプニッツによれば、結局のところ「判明な認識の標を何も与えないのに、明晰判明な認識が真理の標であると言っても何の役にも立たない」ということになる<sup>4</sup>。

これに対してライプニッツはデカルトの「四つの準則」よりも優れた方法として、二つの「分析ないし判断法 *analytica seu ars judicandi*」で十分だとする。その二つの規則とは次のものである。

(1) 「説明されていないどんな語も認めないこと」、

(2) 「証明されないどんな定理＝命題も認めないこと」<sup>5</sup>。

この二つはデカルトの「四つの規則よりも遙かにいっそう絶対的であると私は断ずる」(*ibid.*)。ライプニッツは次のようにも記す。「<明晰判明に私が知覚する *percipio* ことは真である>というこの命題は、<すべての同一命題は真である>さらに<定義についての定義>に戻る、ということが示されない限り証明されえない。(事柄が) そのようであるので、或る存在するもの *Ens aliquod* (これはデカルトの『省察』「第一省察」と「第二省察」に現れる「欺くもの *deceptor*」を指していると解されるが、それ) がいてわれわれを欺く、あるいはわれわれは欺きを蒙るといふ、このようなことをデカルトが怖れる必要はない<sup>6</sup>。一言で云えば、「論証」がしっかりしていれば、疑いの介入する余地がないということになる。

ライプニッツは以上において検討した箇所において『方法序説』「第二部」の「四つの準則」と『省察』あるいは『哲学の原理』における明証性という真理基準とを同列に並べている。或るライプニッツ研究者の表現を借りれば、デカルトの方法は「直観主義 *intuitionisme*」的で (Yvon Belaval, *Leibniz critique de Descartes*, Gallimard, 1960.)、ライプニッツからすればどれも論証にはなっていないと見たであろう。というのも明証性を真理基準にするならば、誰かによって欺かれるというような事態を招き、明証性だけでは論証にはならないからである。それを一言で、ライプニッツは「デカルトは論証によって強いなければならない場合に、むしろ省察によって読者を導く」<sup>7</sup>と表現する。この点でライプニッツが聞いたデカルトは、『省察』の「読者への序言」における表現を借りるならば「私とともに省察する *mecum meditari*」(AT.VII, p. 9) ことを求めたデカルトということになる。ここに「論証」と「省察」という対立軸を見つることができる。この「省察」という仕方を先のように「直観主義」という言葉を使ってすっきり表現できると看做すならば、「省察」の固有な点が見逃されることになる。明証性の意義が問われないことになるからである。デカルトにとって哲学は誰にとっても自分のことでなければ哲学＝知恵 *sagesse* の探究にならない。ライプニッツにとって万人共有な証拠を示すことができなければ、哲学にならない。次に、この「論証」と「省察」を一つの対立軸にしながらかるデカルト形而上学の方法について考察を加える。

## 第二節 幾何学的な記述の仕方

デカルトは『省察』において「私と共に省察する」ということを読者に求めた。「私と共に省察する」ということは思う、ないし、知ることの辿り方を共にするという、それは実際には、記述された順序に従って<共に、一緒に、思い、ないし、知る>ということである。デカルトが「省察」という方法で『省察』という書物を記したことはこのことを示す。言い換えれば「省察する」ことの順序は記述の仕方と強く結びついているということになる。この点について『省察』に付けられた「第二答弁」を参照しながら検討する。デカルトはそこにおいて一目で読者に見て取れるように諸理由を「幾何学的な仕方 *more geometrico*」展開してほしいという反論者の求めに応じて「記述の幾何学的な様態 *modus scribendi geometricus*」には二つあり、それは「順序 *ordo*」と「論証を進めること *ratio demonstrandi*」であると述べる。その「論証を進めること *ratio demonstrandi*」をまた「分析 *analysis*」と「総合 *synthesis*」に区分する (AT. VII, 155)。

・「記述の幾何学的な様態」

(1) 「順序」

(2) 「論証を進めること *ratio demonstrandi*」

(2-1)「分析」

(2-2)「総合」

デカルトはそれらを次のように規定している。

(1)「順序は第一に定立されたこと(命題として立てられたこと *proponuntur*)が、後に続くどんなものの助けもなしに、認識されねばならず、次に残りのすべては、先立つものどもだけから論証される、というように配置されねばならないという点にのみ存する」(AT. VII, p. 155)。そして「私の『省察』においてはこの順序を極めて念入りに遵守すべく努めた」(AT. VII, p. 155)、とする。

(2)「論証を進めることの理由」

(2-1)「分析は、事物が方法に従って *methodice* そして言わばア・プリオリに発見されたその真なる途を指し示す」(AT. VII, p. 155)

さらにデカルトは「分析」について次のように書いている。「私の『省察』においては、教えるための真にして最善の途である分析にもっぱら従った」(AT. VII, p. 156)、と。先の「順序」について言われていることと合わせて考えるならば、デカルトは『省察』において「順序」と「分析」に従っていると自分で言っていることになる。

(2-2)「総合」は、大きな流れとして、*a posteriori* という方向、つまり、結果から途を示すということであるが、その大きな流れの或る項目について *a priori* に、分析的に示されるということもある、とされる。「総合」とは「結論されたことを論証することで、定義、要請 (*petitio* / 「諸理由」では *postulatum*)、公理 (*axioma* / 「諸理由」では *axioma sive communis notio*)、定理、および問われた問題 (*problema*) の長い連鎖を用いる」(AT. VII, p. 156)。この方法によってデカルトは、「第二答弁」に付け加えられた「幾何学的仕方で配置された、神の實在と、心の物体(身体)からの区別を証明する諸理由」(AT. VII, p. 160)を記した。したがって「記述の幾何学的な様態」のなかでの「総合」的に論証を進める理由・理拠・仕方の实例は、ここに与えられていることになる。

これに対して、「分析」という仕方で書かれている『省察』は「方法に従って」発見されていくという「論証」であるとともに、著者の省察の順序を記述しているということになる。今、「論証」と言ったが、ここでの「論証を進めることの理由」における「論証」は、たとえば、ライブニッツに見たように、予め二つの規則を立てておくような論証ではない。思いの進行が「論証」になるような論証、言い換えれば、省察が論証になるような論証である。そしてその二つ、つまり、「分析」という発見の順序も、「総合」という記述の仕方も「記述の幾何学的な様態」に含まれていた。一言で云えば『省察』という書物は「方法に従って」省察という仕方で論証されていることになる。『省察』は省察することの順序で見出された事柄を見出される理由に基づいて書かれた書物だということになる。

それでは思索の順序を記述するということと理由に基づいて論証を記述することの間に隔たりはないのか。真理に向けての思索がそのまま発見の道である場合には、両者の間に隔たりはない。言葉を用いずに思索することはできないその思索を、言葉を用いて理由の連鎖である論証へと整える。言葉を用いて思索することと、その思索を理由の連鎖として述べること、これが順序と分析の異なりということになる。しかし、分析において思索は「方法に従って」いるのでなければならない。「記述の幾何学的な様態」の一つの枝分かれのなかで「方法に従って」と言われる。それでは上位概念と下位概念のように見える「記述の幾何学的な様態」と、「方法」に従うという仕方はどのように異なるのか。少なくともこの「第二答弁」の当該箇所、この点についてはっきり規定されていない。ライブニッツがデカルトの「方法」を咎めるときにこのような不明確さも含まれているであろう。この咎め立てを解消するというよりも、事柄の解明のために、私たちはさらに「幾何学」と「方法」との関連へと追究を進めなければならない。この二つを結びつける環が「マテーシス」という概念に求められる。

### 第三節 マテーシスの広汎性

別のところで述べたようにデカルトの「マテーシス」という概念についてはその内実が明確になるほどには、デカルト自身による記述が与えられていない<sup>8</sup>。そのテクスト的な事情のために『理知能力指導のための諸規則』(以下『規則論』と略記する)における「普遍的マテーシス *mathesis universalis*」という概念が基礎におかれて「マテーシス」について解釈されることが多くなる。しかし、「普遍的マテーシス *mathesis universalis*」を『省察』以降に使用される「マテーシス *mathesis*」に繋ぐためには、『規則論』が中断のまま終えられた作品であること、さらに

その後1630年というデカルトの思索における或る転回点がやって来ることを斟酌しなければならない。1630年の転回点は「永遠真理創造説」とく認識からの出発と纏めることができる。言い換えれば、「意志」概念と「知性」概念とのデカルト的革新がそこに見いだされるということになる。それゆえに『規則論』の思索と『方法序説』、『省察』、『哲学の原理』などの後の思索とを切れ目なしの連続的展開とすることはできない。しかし、多くの研究者は『規則論』における「普遍的マテーシス」と後の思索における「マテーシス」の間に切れ目を見てはいないように思われる。このことを念頭におきながら諸家の見解を少しく見てみることにする。注目すべき点は、「マテーシス」の広汎性と諸学における第一性と方法としての内実である。

この「普遍的マテーシス」という概念の系譜についてはD. ラブインによって既に示されている<sup>9</sup>。そのなかでもデカルトへの流れの上流についてだけ簡潔に紹介してみよう。先行者であるクラプリの研究<sup>10</sup>を踏まえた上で、彼はデカルトがこの概念について受けたであろう影響の発信点として次の二人を挙げる。つまり、A. ファン・ローメン (Adrian Van Roomen (Adrianus Romanus), *Apologie d'Arichimède*, 1597) とJ. H. アルステッド (Johan Heinrich Alsted, *Methodus admirandorum mathematicorum*, 1613) である。その二人は共通の源をもつとされる。その源とみなされているのはB. ペレイラ (Benito Pereira, *De communibus omnium rerum naturalium principiis et affectionibus*, 1576) である<sup>11</sup>。この系列においては「共通な／一般的な数学、普遍的マテーシス、第一マテーシス *mathematica communis, generalis, mathesis univeralis, prima mathesis* はまったく等価な表現として看做されていた<sup>12</sup>。ファン・ローメンは「諸数学の確実性についての問題」というタイトルの下に、数学だけでも、数学の哲学だけでもなく、自然哲学についても扱っているとされる<sup>13</sup>。また、アルステッドの表の一つによれば、「マテーシス」は「抽象的なマテーシス」と「具体的マテーシス」に区別され、前者に代数学と幾何学が、後者に物体についての学などが含まれるという<sup>14</sup>。要するに「普遍的マテーシス」もそうであるが、ファン・ローメンとアルステッドによって「普遍的マテーシス」だけではなく「マテーシス」も数学に係わるとしてもさらに広く方法論をも含む学問の総称と考えられていた。

或る書簡によればデカルトは『方法序説』の表題として「或る普遍的な学の計画 *le projet d'une Science universelle*」を含んだものを考えていた (à Mersenne, 3-1636, AT. I, p. 339)。また、『方法序説』を出版する意図について彼は別の書簡で次のように記す。「人々に道を用意し、川の浅瀬の底を調べる *de lui préparer le chemin, et sonder le gué*」という「この事に向けて私は一つの一般的方法 *une Méthode générale* を提示する、私はそれを実のところ *véritablement* 教えてはいないが *laquelle véritablement je n'enseigne pas*、それは以下に続く三つの試論を通して証明を与えようと努めた方法である」、と。その方法は「一つには、哲学と数学とが混じった主題、二つには、哲学についての純粋な全体、三つには、数学の純粋な全体」に、すなわち「屈折光学」、「気象学」、「幾何学」に「一般的に」適用される。もちろん、それぞれの分野に適用されるにはそれぞれに固有な仕方が述べられている。その一方で「一般的方法」とはこれらを覆う方法であり、「序説」本文ではこれ以外のものについて語る必要はなかった (cf. à \*\*\* , 27-4-1637, AT. I, p. 370)<sup>15</sup>。この「一般的方法」の体系における位置という観点、言い換えるならば、その広汎性と諸学に対する第一性という観点から見た場合に、「普遍的マテーシス」および「マテーシス」とは概念として体系構成の近傍にある。それとともにもう一つ留意しておくべきは、この「一般的方法」が「マテーシス」と重ねられるならば、それは既に与えられた方法ではなく、デカルトがそれを自らの創意のもとに作り上げたと考えていることである<sup>16</sup>。

その一方で「マテーシス」は「オントロジャ=存在論」という概念とも関係をしている。既に「存在論」概念と近代形而上学との関係において既に述べたところであるが、「存在論」という用語は「形而上学の歴史のなかに入ってくる」<sup>17</sup>のは、R. ゴクレニウスの『哲学辞典』以来のこととされる<sup>18</sup>。この辞典の「思弁的諸学における質料の抽象 *Abstractio materiæ in scientiis contemplatricibus*」という項目の欄外に「オントロジャ」というギリシャ語が現れる。そこに「オントロジャと存在についての哲学 *ὄντολογία et philosophia de ENTE*」と記されている<sup>19</sup>。思弁的な学において理拠=理由に従ってだけ質料を捨象(抽象)する場合に、抽象は「数学的 *Mathematica*」とされる。この数学は「オントロジャ的なものについての、言い換えれば、存在ないし超越的なものについての哲学に *Philosophia de ente seu Transcendentibus*」属する<sup>20</sup>と述べられている。同じく『哲学辞典』の別の項目を参照してみると、量の区分に応じた「マテーシス」と運動する物体を扱う「物理学」とが「第一哲学 *Prima Philosophia*」

の「理論学Scientia theorica」に分類されていることがわかる<sup>21</sup>。「オントロジア」あるいは「第一哲学」と「数学」あるいは「マテーシス」が互いに覆い合うということはないにせよ、「数学」あるいは「マテーシス」という概念が「第一哲学」の物理学への展開をも含めた方法論、別の視点から見れば、体系的位において論理学に相当するということが見て取れる。J. F. クルティヌのようにゴクレニウスがギリシャ語で「オントロジア」という名前を与えた領域と、デカルトが「マテーシスMathesis」という名前を与えた領域とを対応づけることはできないとしても<sup>22</sup>、「数学Mathematica」ないし「マテーシスMathesis」と「オントロジア」との語としての近接性は「顕著である」という点をわれわれも認めることができる<sup>23</sup>。

#### 第四節 方法としてのマテーシスによる諸学の成立

D. カンプシュネルは『規則論』における「普遍のマテーシス」について形式的には「一種の数学」であるが、その位置からするならば「数学的な諸学問disciplinesの実象の本質*l'essence réelle*」を示し、「理由についての学問la discipline de la raison」だと述べる<sup>24</sup>。カンプシュネルは数学的であるという特徴を引き離さないにせよ、その「第一」という点と普遍性を『規則論』における「普遍のマテーシス」に認めている。先に見た『方法序説』に関する「方法」についてのデカルトによる言及をこれに組み入れるならば、そこに記されている「一般的学」という表現と『規則論』における「普遍のマテーシス」とが同じく諸学問の方法を示すという役割を示していることが明らかになる。『規則論』は「普遍のマテーシス」について「第四規則」に集中的に論じており、「第八規則」で付加的に論じている。後者では「屈折」の比の問題が「マテーシス」ではなく物理学に属するという例が述べられている。そもそも『規則論』における「マテーシス」の出現箇所は一二箇所とされ、「普遍のマテーシス」という連辞は二箇所のみに見られる<sup>25</sup>。

その「第四規則」について少し詳しく「マテーシス」を追いかけてみよう。「第四規則」では「方法」の必要性が説かれている。まず、かつての「哲学の創設者達」の「マテーシス」について、その「マテーシス」を「彼らは、われわれの時代に通常なされているのとは別個なものとして認知していた」(AT, X, pp. 375-376)と記される。その「マテーシス」を古代の人たちが「完全に知っていた」とはデカルトは看做していない。古代において「哲学とマテーシスの真なる観念」は認知されていたのであるけれども、これら二つの学を古代の人たちは導出することはできなかった。つまり、パッポスとかディアファントスの作品には「真なるマテーシス」の「諸痕跡*vestigia*」は現れているのだが、彼ら古代の人たちはその「マテーシスがきわめて容易で単純であったので*quia facillima erat & simplex*」<sup>26</sup>その「技術*ars*」そのものを教えることをしなかった(AT, X, pp. 376-377)。そしてこのような経過を辿って、デカルトは「代数学と幾何学の個別的研究からマテーシスについての一般的な或る探究へと」<sup>27</sup>呼び戻された(AT, X, p. 377)。そこでこの「マテーシスという名前」によって何が理解されているのかということ、どうして「天文学ばかりでなく、音楽、光学、工学、その他の多く」が「数学の部分であると言われる」のかということ、それを彼は尋ねた(AT, X, p. 377)。「マテーシスという名前は学問*disciplina*という名前が言おうとしているだけと言おうとしている*Matheseos nomen idem tantum sonet quod disciplina*」(AT, X, p. 377)<sup>28</sup>。「何がマテーシスに属し、何が他の学問に属するかは」学校に入った者にはわかっている。これらの事柄を「いっそう注意深く考察する者にとっては」「順序あるいは尺度が吟味されるすべてだけがマテーシス」に関係し、これは数、図形、星、音など「尺度が探索されねばならない」ような対象には「関わらず*nec interesse*」、「順序と尺度が、どんな種別化された資料にも結びつけることなしに探索されうる、或る一般的な学がなければならない」ということが知られる(AT, X, pp. 377-378)。この「一般的な学*scientia generalis*」が古代からの既に受け入れられている用語を使って「普遍のマテーシス」とデカルトは呼ぶ(AT, X, p. 378)。このうちには「数学的諸学の他の部分」も含まれる(AT, X, p. 378)。この「普遍のマテーシス」という名前を「すべての人が識っている」にもかかわらず、人々はこれに依存する学問を熱心に求めるのに、普遍のマテーシスの方は「すべての人々にきわめて容易なものとして看做されていて、誰も学ぼうと苦勞しない(AT, X, p. 378)。「私と言え、自分の弱さを自覚しているので」「もっとも単純でもっとも容易なものから常に出発する」という「順序」を守ることにしていた(AT, X, pp. 378-379)。デカルトは「そういうわけでそれ以降、普遍のマテーシスを自分のなせる限りにおいて開発した」(AT, X, p. 379)のである<sup>29</sup>。要するに、『規則論』における「普遍のマテーシス」は「マテーシス」の広汎性を明確に表示するために用いられて

おり、そのことをもっとも縮約して言えば、「順序」を「順序」として、そして「尺度」を個々の質料を離れて論じるという方法を示している。それゆえに他のすべての学問がこの「マテーシス」に依存することになる。「マテーシス」はそのようにして「方法」概念と結びついているのである。

このような「マテーシス」と自然学との関係はどのようなものであるのか。『規則論』における「普遍的マテーシス」の場合であるならば、すべての学問がこの方法に貫かれて横並びになるはずである。もう少し言えば、「単純本性 natura simplex」の「必然的結合conjunctio necessaria」(AT. X, pp. 420-421)として一切の事象が記述されるので数学的確かさが物理学を支えるというような基礎づけという関係は『規則論』の「普遍的マテーシス」には見出されない。『方法序説』の表題に関する先に見た書簡によれば「普遍的学Science universelle」は「われわれの自然本性を完全性のいっそう高い段階へと高めることができる」学であるとされる。その一方で、この学は屈折光学、気象学、幾何学を含んでいるように見える(AT. I, p. 339)。このことは先に見た第二の書簡において、「一般的方法」が「哲学と数学の混合された主題」、純粋に哲学的な主題の全部、純粋に数学的な主題の全部に適用されるように記されていることとも符合する(AT. I, p. 370)。これはまた『方法序説』冒頭に記されている「六部」の構成についても言えることである。簡潔に纏めるならば、「第一部」では諸学についてのさまざまな考察が述べられ、「第二部」では「著者が探した方法についての主要な規則」が提起される。「第三部」では「彼がこの方法から引き出した」道徳についての規則の幾つかが記され、「第四部」では「彼の形而上学の諸基礎」である神と人間の魂の实在証明が提示される。「第五部」では物理学の諸問題についての「順序」が述べられ、とりわけ心臓の運動が解明される。「第六部」では自然探究を前進させるために求められることについて述べられる<sup>30</sup>。ここから読み取れるわれわれの探究にとって肝要なことは、第一に形而上学と自然学との間に階層性が見られないこと、第二に「方法」は彼自身が探し出したものとされていること、第三にその「方法」はそこから道徳についての規則も引き出すことができるような内容をもったものであることである。これらは先に見た『方法序説』について言及している書簡に述べられていることと響き合っている。これらを纏めて言うならば「普遍的学」、「一般的方法」、「方法」は、それを適用してさまざまな学問が得られるという点で、諸学との間には線が引かれるにもかかわらず、諸学の間には階層関係が認められていないということになる。別の言い方をすれば、『方法序説』では仏訳『哲学の原理』「序文」に示されている樹形的な諸学の階層は構想されていないということである(AT. IX, pp. 14-16)。「普遍的マテーシス」も「普遍的学」も「一般的方法」もそれをさまざまな主題に適用することによって諸学が成立する、その意味で第一のものであったということになる。そしてこのことが『規則論』と『方法序説』において共通していること、また既に別の所で指摘したようにその「第四部」に展開されている形而上学が途上のものであること<sup>31</sup>、これらのことを考えるならば、1630年がデカルトの思索上の大きな転回点をなすにもかかわらず「普遍的マテーシス」についての捉え方は1637年の『方法序説』まで存続していたということがわかる。

## 第二章 コギトの形而上学とモナドの形而上学

### 第一節 諸学の樹形的構成

しかし、その一方で先に見たように『哲学の原理』ではまったく異なる。『哲学の原理』「第一部」の表題には「人間的認識の諸原理について」(AT. VIII, p. 5)と記されている。その「第二部」は「物質的事物の諸原理について」(AT. VIII, p. 40)である。仏訳『哲学の原理』(*Principes de la philosophie*, 1647)の「序文」では「哲学の第一の部分は形而上学であり、それは認識の諸原理を含む」(AT. IX-2, p. 14)とされている。『哲学の原理』「第一部」は形而上学、ないし第一哲学であり、その「第二部」には物理学の基礎が提示されている。つまり、認識の原理の解明が物理学の確実性に基礎を与えるという点で、形而上学ないし第一哲学と物理学との間には階層性がある。『方法序説』には見られない階層性が『哲学の原理』には見出される。これが『省察』における「マテーシス」の問題なのである。「純粋で抽象的なマテーシス」(AT. VII, p. 65)、「純粋なマテーシス」(AT. VII, p. 71, p. 74 & p. 80)という表現は「第五省察」から「第六省察」への方法的基盤の橋渡しを示している。言い換えれば、「マテーシス」によって数学から物理学への移行が成し遂げられる。この限りでは「純粋で抽象的な」学問から「純粋な」学問への移行である。ビュゾンは『規則論』・『方法序説』から『哲学の原理』への「マテーシス」概念の変容について、

物理学が感覚される事物を対象に組み入れるという点に着目する。『哲学の原理』「第二部」から「第三部」への移行にその問題が生じる。ライプニッツの或る時期の考えを参照軸としてみれば、「抽象運動論ないしは感覚と諸現象に依存しない運動の普遍的理由」<sup>32</sup>と「具体運動論ないしは地球における諸現象の理由についての仮説」<sup>33</sup>との関係に相当するであろう。ライプニッツの思考の展開、ホイヘンスなどとの影響関係を別にして、M.フィッシュンの言い方を借りて両者の差異を述べてみるならば、次のようになる。事柄は「物体についての概念化」と「運動を分析する手段」とに関わる。それはまた「理性的な物体」と理性だけに従う計算可能性との関係である。ここに「抽象運動の法則と具体運動の法則との間の分離」を見ることができる。それはまた「運動の無限小解析の要素であるコナトゥス *conatus* が幾何学的に合成されて、単純な加算ないしは減算によって二つの物体に共通な結果になる運動を定義する」ということでもある<sup>34</sup>。このようにフィッシュンの見解を捉えることができるならば、抽象運動論と具体運動論の間に方法の上の違いはないことになるであろう。

これに対して、デカルトの場合に『哲学の原理』「第二部第六四項」に「マテーシス」が記されているということとはどのような意味をもっているであろうか。この「第六四項」の表題をさらに纏めてみると次のようになっている。「物理学においては、幾何学あるいは抽象的マテーシスにおける」原理以外のものを「私」は認めも望みもしない、と (*PP. II, a. 64, AT.VIII, p. 78*)。これは物理学と「マテーシス」の準化を示しているのか。つまり、物理学も幾何学も「マテーシス」という方法を適用されてえられるということを示しているのか。そうではない。一つにはこの「六四項」が先ほど見たように、「第二部」である「物質的な事物の原理について」から「第三部」の天体論である「可視化可能である世界について *De Mundo adsectabili*」への移行を示しているからである。第二に、表題が示しているのは幾何学と「抽象的マテーシス」の言い換えであり、それらと物理学の差別化だからである。ド・ビュゾン『哲学の原理』「第二部第六四項」と『省察』における「マテーシス」に着目しつつ次の解釈を提示している<sup>35</sup>。すなわち、「第六省察」における純粋なマテーシスの対象は「一般的に見られた *generaliter spectata*」物体の性質であるが「個別的なもの *particularia*」も物理学の対象になる (*AT.VIII, p. 312*)。結局のところ、感覚についての解明という回り道をして、すべての現象はマテーシスの原理によって解明されるということになる。感覚の理論が一般的物理学と個別的物理学を要求する以上、この回り道进行することはできない<sup>36</sup>。「感覚についての理論は現象のマテーシスへの還元が実効性をもつ場 *lieu effectif* である」<sup>37</sup>。さらに彼は「ブルマンとの対話」から、マテーシスの対象は「真にして実象的存在 *verum et reale ens*、真にして実象の本性をもち、まさしく物理学の対象に劣らない」<sup>38</sup>という文を引用して、この考えに基づけば数は対象に入らないとしている<sup>39</sup>。「ブルマンとの対話」そのもの、さらにこの箇所については、それがデカルトの述べた通りかどうかについて慎重さが求められる。しかし、既にわれわれが明らかにしたとおり、数学的真理の可能的実在が、個々の物体の現実的実在から何かを差し引いた実在ではないのであるから、この箇所における「数学すべての証明が真なる存在と対象に関わるように、マテーシスの全体的普遍的な対象もそのようである」<sup>40</sup>という点をデカルトの立場を示すものとして認めることができる。

## 第二節 数学と物理学の関係

次にこの点を「第五省察」から「第六省察」への展開において確かめてみよう。「第五省察」において想像力の働きが空間を開くことであると見出され、ここに幾何学の基盤が成立する。この広がりである空間を区切ることで、数取得される。換言すれば連続量の分割として離散量が得られる<sup>41</sup>。幾何学が開かれて代数学が成立する。この流れのなかで「第五省察」において「純粋で抽象的なマテーシス」(*AT. VII, p. 65*)という表現が用いられ、「第六省察」において「純粋なマテーシス」(*AT. VII, p. 71 & p. 74*)という表現が用いられる。つまり「第五省察」で確立される数学は「純粋で抽象的なマテーシス」と表現される。それに対して「個別的な」事柄を扱う物理学の基礎理論は「純粋なマテーシス」と呼ばれ、用語上の使い分けがなされる。この関係とライプニッツの「抽象運動論」と「具体運動論」の差異を参照してみるならば、デカルトにおいて物理学の基礎としての確かさを確立するためには感覚の現実性を評価しなければならないということが見えてくる。ビュゾンの言う「回り道」である。このように明らかになってくれば、デカルトが『省察』と『哲学の原理』で用いている「マテーシス」は形而上学の方法論ではけっしてないことも明らかになる。形而上学から数学と物理学へと移行する際に、その移行の印となっているのが「マテーシス」という概念である。その点で先に見たカンブシュネルのように、「マテーシス」という概

念から数学的意義を引き離すことはできない。しかし、形式的論理学によって代替されるような「方法」でもない。というのもわれわれが既に明らかにしたように、「マテーシス」が「第六省察」冒頭に「第五省察」の成果として捉え直されるそのときに明証性という真理基準もともに改変される<sup>42</sup>。もう少し内容に即して言うならば、次のようになる。すなわち、「第六省察」ではこの明証性という基準を用いて「純粋数学の対象」である限りの物質的な事物について可能的実在を帰結することがその冒頭で確認される。「明晰判明に私が知覚するのであるから、当の純粋マテーシスの対象はその限りで実在しうる」(AT. VII, p. 71)。この実在しうる対象、これが「個別的なものども *particularia*」という相においてみられる場合に、言い換えるならば個々の物体として考察される場合に感覚の確実性が評価されなければならなくなる。感覚という認識能力の評価は「第六省察」で解明されるべき重要な主題である。

この「マテーシス」という概念の特質を纏めてみるならば、次のようになる<sup>43</sup>。第一に、デカルトは「マテーシス」は自分こそが肝心なものとして用いていると考えていた。デカルトはスコラ学者からの攻撃に応答するなかで、「マテーシス」を「私こそ最初の *præcipue* に用いていると私は言われている」(Epistola ad P. Dinet, AT. VII, p. 571)と書いている。第二に、それは哲学における論証の方法であるとされている。この点については次のように言われる。スコラ学者たちは「マテーシス」と哲学の間を区別するが、自分にとっては哲学の問題に「数学的証明」を与えることが重要である(à Mersenne, 30-8-1640, AT. III, p. 173 / GB. pp. 1274-1276)、と。第三に、「マテーシス」という概念は発見することと発見された学知を包摂する概念である。オランダの若い研究者に向けた書簡においてデカルトは「マテーシス」を「記誌 *historia*」と「学知 *scientia*」に区別し、前者は発見されたもののすべてであり、後者は問題を解決し「人間の理知能力 *humanum ingenium* によって」発見できるものを独力で見出すための「技法 *industria*」とする、「マテーシスの理論」の重要性が説かれている(à Hogelande, 8-2-1640, AT. III, pp. 721-724 / GB. pp. 1154-1156)。第四に、ガサンディが「第五反論」において「純粋マテーシス(数学) *pura mathesis*」と「混合マテーシス(数学) *mixta mathesis*」の区別(AT. VII, 329)を持ち出しているのに対して、デカルトはこの区別を立てない(AT. VII, 384)。デカルトはこの言い方を受け容れるか否かについては答えていない。ガサンディの再反論もこの点に関してはそれ以上に深入りをしていない<sup>44</sup>。デカルトにとってガサンディの区別は反論の必要を見出すことのないものだったのであろう。その一方で「純粋マテーシス(数学)」の対象を「物体的本性」とするデカルトからすれば、個別的で(時間空間中に生じ感覚によって捉えられる)物体的現象も物体的本性に支えられていることは確かである。それゆえデカルトがこの点での「純粋」と「混合」という区分を受け容れなかったとしてももっともなことと言える。

『省察』、『哲学の原理』、諸書簡を通して明らかになることは「マテーシス」が方法であり、しかし、形而上学を構築して行く際の方法ではなく、空間性が開かれてから使用される方法であるということである。つまりは「マテーシス」は幾何学という場で働く方法であるが、それは感覚の確実性の評価を介して物理学にまで浸透して行く方法である。別の視点から見れば、思いの思いとして論じる領域において適用されるのではなく、広がる世界に適用される方法だということである。その意味で『方法序説』「第二部」に記されている「四つの準則」と同じ次元にはないし、同じ内容でもない。それではこの空間に適用される方法は、先に見た『省察』「第二答弁」に述べられている「幾何学的な記述の仕方」とはどのように異なるのか。この「記述の仕方」は『省察』全体に及ぶ「仕方」であった。そして「マテーシス」がそれとして説明される場合に先に見たように「記誌」と「学知」を含むもの、前者は発見されたすべてを含み、後者は「人間の理知能力によって」発見できるものを独力で見出すための「技法」であった。この後者は「幾何学的な記述の仕方」のうちの「論証を進めることの理由 *ratio demonstrandi*」に含まれる「分析」に対応している。先にわれわれは「順序」と「論証を進めることの理由」の区別を思索の進行としての記述とその進行の捉え直しとしての記述と解釈した。われわれが言葉を用いて思考するという事実を基盤におくならば、思考するそのありさまそのものと言語表現として系列化された思考という区別になる。判断が「知性と意志の協働」によって成立することを酌量するならば(AT. VII, 56) 思いの流動とその流動に意志の働きが加わる流れとの差異になる。「マテーシス」は空間性の原理(幾何学の原理)と空間的な個別の変化の規則(運動論)という場面において成立し、それをそっくり思いの領域で示すならば「順序」と「論証を進めることの理由」として露わになる。これがライプニッツによって、デカルトは論証すべき場合に省察を求めると言わしめたところであ



ろう。デカルトの『省察』は発見の途を辿り、つまり思いが動いていくまを記述するところに論証構造が開かれてくるといふ道筋を辿る。その開かれてくる論証構造が明証性という真理基準に落ちる。思いがそのまま動いて行くということは順序を追うということ、すなわち「第一に定立されたことが、後に続くどんなもの助けもなしに、認識されねばならず、次に残りのすべては、先立つものどもだけから論証されるというように配置されねばならない」ということである。

### 第三節 知ることの存在論

「第五省察」によれば延長量を切断することによって離散量が得られる。そして「第五省察」において想像力によって空間が開かれ、そのことによって数学の場が創始される。また「第五省察」が「第六省察」において開かれるべき物理学に基礎を与える論理的な仕組みを示す。つまりは学問的知識の成立に必須の必然性の範型と推理を積み重ねる記憶力に保証を与える。要するに「第二答弁」で述べられている「幾何学的な記述の仕方」とは学問的知識の記述の仕方であり、それは同時に論証の展開の仕方でもある。その本質として示されているのが「順序」である。その順序とは第一の項は自明であり、その自明な項を使って次の項が認識される、そのように先立つものから後なるものへと流動することによって論証がなされる。認識の順序が正しければ、認識の順序通りに並べて行くことが論証になる。それが「分析」というスタイルである。「認識の順序が正しければ」と述べたが、その正しさ、真っ直ぐであることは何によって測られるのか。このことについてデカルトは述べていない。何らかの自明なことが見出され、その次に見出されたことが先に見出された自明なことによってだけ知られるならば、この思考の流れは順序正しいことになる。先には「認識される」、つい今は「知られる」と書いた。或る一つのことを他のことによって認識される、あるいは知られるとはどのようなことか。もし、知ることの条件が予め確保されているのならば、この「順序」はその条件に依存することになる。否、知ることの論理的条件が確立されているのならばそれに従うだけで順序は不要になる。デカルトに従えば論証が形式をもった論証として確立される前に、認識し認識されること、知り知られることが成り立っていなければならない。知られなければ論証もない。知ることが成立することは順序を追うということである。第一の項は自明的と述べたが、デカルトが記していたのは「続くどんなもの助けによっても」知られないということである。しかも「第一のもの」をデカルトは複数形で書いていた。このことが示しているのは思考の流れがまず知っているものから始まるということである。もっと言えば探究の始まりは既知であるということになる。その次のものは第一の既知のものを知っていれば認識される、つまりは<わかる>。第三のものは第一のものと第二のものを認識していれば、理解される。第二〇番目のものは第二一番目のものを必要とすることなく、それまでの系列の上に立てば認識され、理解される。まだ到達していない第二一番目を必要としないとはどのようなことなのか。それは順序のないところにも順序をつけて行くということであり、仮説を予め立てないということではない。仮説を立てる、目標を定めるということも、順序の始まりになる。そしてまた二〇番目から二一番目に進めずに呻吟を重ねる。そのあげくに二一番目に進む、そして繰り返す。それが慣れるということである。傾向性を身につけるということである。このことは一見するとまったく当たり前のように見える。その通りである。これが思いの流動の真っ直ぐな方向であり、これが空間性の下にこの真っ直ぐさが成し遂げられるのが方法としての「マテーシス」である。数学と物理学の確実性を基盤において支える知ることの方法であり、知られることの系列、つまり学知である。

この順序ということさらには経験に近づけて捉えようとするときにどのようなことが見えてくるのか。「認識する」ということが知性の働きとして捉えられるということ先ずもって明確にしておこう。「認識する」ことは感情をも含めた感覚と想像力を別にして、そして内容について知性に依存する意志の働きも別にして、知性の働いているさま、知ること、別言すれば先の三つの働きを縮約して見た場合の「思う」ということである。縮約してみた場合の思うことは感覚内容も想像内容も含んでいるが言語表現としてだけそれらを含んでいる。手の先に感じていない暑さ、空間性のない三角形は縮約された思いであり、知られていることである。「知ること」は「感覚すること」、「想像すること」の「形相的概念」に含まれている。言い換えれば、感覚すること想像することが成立しているときには知ことは既に働いている。そうでなければ、たとえば、「暑い」という感じはこの「暑い」という表現をもたず、留まることなく消失する。その点で知ることとは言葉を使って知ることである。もちろん、

その言葉が国語であるのかどうか、単語なのか文なのかというに類することは別問題である。この知ることの継起を「知の流れ」と呼ぶことにする。この継起のどの段階をも知の流れと呼ぶこと理由は、第一の項、始まりを示す項は既知であり、それ以降の項はそれ以前の項のあとに生じる項として知られているからである。言い換えれば、始まって終わるまでのすべてが知られているのでなければならないからである。もし、或る項から別の或る項まで記述されるならば、後者の項はそれに先立つ項によって論証されていることになる。知の流れが論証されるためにこの流れ以外の手続きないし基準が要求されるわけではない。それでは知の流れの記述には真偽はないのか。或る意味でそうである。「或る意味で」とは意志が働いて判断にまでもたらされていない場合には、ということを示す。「私」はいつでも意志が発動しないように意志を働かすことができる。したがって、知の流れのどのような纏まりについても真偽を宙づりにしておくことができる。逆に言えば、知の流れのどの段階についても「私」は意志を発動して真偽の主張をすることができる。ということはこの知の流れを考察する場合には意志の働きと共に真偽を「私」から疎遠な事態にしておくことができる。そのように「私」の「私性」の行使である意志の発動を括弧に入れておくことによって、知の流れ、順序ということ「私性」の行使とは異なる次元で考察することができる。このことによって知ることの存在論の次元が開かれる。この次元は通常は論理学とも呼ばれる。それはまた数学の次元でもある。この数学は先に述べたように幾何学も数論も数学であるような数学、想像力が空間を開いて幾何学が成立する次第を支えている数学である。知ることの流れだけに支えられる空間化された数学である。しかし、この「マテーシス」を上位の言葉で表現するならば「知ることの存在論」ということになる。「知ること」があるがままに、言い換えれば、意志の発動とは別のところで、さらに言えば「私性」の行使とは別の地平で論じられることになるからである。このあるがままに捉えられるということが「知ることの存在論」の一つの特権である。真偽はどのような局面であれ成立する。意志の発動を留める意志を発動すれば、どのような局面においても真偽は生じない。知の流れを真偽に保護されながら真偽にかかわらず考察できる。これが「知ることの存在論」がもっているもう一つの特権である。

自明な事柄から、あるいは、既知の事柄からその先へと知性の流動が生じる。その流動が真っ直ぐ流れて、「一つ」の留まりを得る。それが明晰判明な知である。言い換えれば、明証性とは思いの真っ直ぐな流れとして表現される。その最後の項はそれまでの項のすべてを含んでおり、それまでの項のすべてに支えられて安定する、つまり明晰判明な知となる。もう一度辿り直して記述することが分析的記述である。辿り着いたところを出発点としてこの流れを既存の論理形式に組み替えて記述することが総合的記述である。いま「項」という語を用いたが、これは単位ではない。予め区切りが得られている知の内容でもない。ライブニッツの言い方を借りれば、「コナトゥス」であり「モナド」である。つまり、知の流動の出発点も、途中も、最後も、それ自体においては「一つ」という外的な区切りをもっていない。多を表出する「一つ」としての「一」である。知の流動としての系列は流出として得られ、後なるものは先なるものを含んでいるばかりでなく、先なるものはいずれ後なるものとして含んでいる。その圧力を減殺させることによって流出が生じ、知の系列が得られる。縮約はまた凝縮であり、流出は希薄化を帰結する。そのどの段階も一切を映し出しているが縮約の適切さが明証性として帰結する。流動の始まりはあまりの凝縮に判明性を欠き、明晰判明の度を超すとあまりの希薄に明証性を欠くことになる。

## 注

- 1 G.W. Leibniz, *Dissertatio de Arte combinatoria*, Ende März 1666. Druck B (Leipzig 1666), A. VI, 1, p. 171 & p. 173. : 9. *Disputatio de casibus perplexis in jure*, 5. (15.) November 1666. Druck B (Nürnberg 1666), A. VI, 1, p. 236.
- 2 G.W. Leibniz, *Nova methodus discendae docendaeque jurisprudentiae. Ex artis Didacticae Principiis in parte Generali praemissis, Experientiaeque Luce*: Autore G. G. L. L. 1667, A. VI, 1, p. 272 & pp. 279-280.
- 3 G.W. Leibniz, *Cartesius veram analysin amisit* [1683 bis 1695 (?)], A. VI, 4, b, p. 1472.
- 4 289. *De la philosophie cartesienne*, [Sommer 1683 bis Winter 1684/85], A. VI, 4, b, pp 1484-1485.
- 5 G.W. Leibniz, *Nova methodus discendae docendaeque jurisprudentiae. Ex artis Didacticae Principiis in parte Generali praemissis, Experientiaeque Luce*: Autore G. G. L. L. 1667, A. VI, 1, p. 272 & pp. 279-280
- 6 G.W. Leibniz, *De veritatibus, de mente, de Deo, de universo*, 15. April 1676, A. VI, 3, p. 508. 括弧内は筆者の補足。

- 7 G.W. Leibniz, An Honoré Fabri, [Hannover, Anfang 1677], A. II, i, p. 298.
- 8 「マテーシス」については『感覚する人とその物理学』61頁から64頁をも参照のこと。
- 9 D. Rabouin, *Mathesis universalis : L'idée de « mathématique universelle » d'Aristote à Descartes*, PUF, 2009.
- 10 G. Crapulli, « *Mathesis universalis* ». *Genesi di una idea nel XVI secolo*, Dell'Ateneo, 1969.
- 11 D. Rabouin, p. 194.
- 12 *Op. cit.*, p. 197.
- 13 *Op. cit.*, p. 198.
- 14 F. De Buzon, La *mathesis des Principia* : remarques sur II, 64, dans J.-R. Armogathe, G. Belgioioso, *Principia Philosophiæ* (1644-1994), Naples, Vivarium, 1996, p. 309.
- 15 « Véritablement »の訳についてはJean Nicot: *Le Thresor de la langue francoyse* (1606), « Veritablement, Vere. / Veritablement j'ay cette opinion arrestée et fichée en mon esprit, Et quibdem ego sic apud animum meum statui.における« vere, et quidem »の意を採用した (<http://artflx.uchicago.edu/cgi-bin/dicos/>)。また、「Sonder le gué」は「瀬踏みをする」と訳されることがあるが、「瀬踏み」とは「予め」・「何かをする前に」「ちょっと試してみる」という意味だが、ここで「予め」という意味をデカルトは含めているのであろうか、アカデミー版の辞書において« sonder le gué »にあまり「予め」という意味はなさそうである。もちろん、『方法序説』は本格的な学問的記述の展開をしているわけではない。その意味では『哲学の原理』の「前」である。だが、『方法序説』の方法が「予め」であり、『省察』、『哲学の原理』の方法が「予めの方法を先に伸ばした本格的な方法」と考えることはできそうもない。それは「方法」と諸学問の階層化との関係でもある。『方法序説』の「方法」が諸学問を方法で統一的に扱うという「方法」であるのならば、『省察』、『哲学の原理』の方法とは異質のものであると言えよう。
- 16 Cf. R. Descartes, Epistola ad P. Dinet, AT.VII, p. 571. & à Mersenne, 30-8-1640, AT. III, p. 173 / = à Mersenne per X\*\*\*, 30-8-1640, GB. p. 1274-1276. 拙著『感覚する人とその物理学』知泉書館2009年、61頁から63頁参照。
- 17 J.-L. Marion, *Sur le prisme métaphysique de Descartes*, PUF, 1986, pp. 79-80 et p. 29, n. 27. Cf. J.-F. Courtine, *Suarez et le système de la métaphysique*, PUF, 1990, p. 408, p. 410, n. 6, pp. 411-412.
- 18 Rudolph Goclenius, *Lexicon philosophicum*, Francfort, 1613/ Marburg 1615 / Olms 1980. 以下*Lex.Philo.*と略記する。
- 19 *Lex.Philo.*, p. 16.
- 20 *Ibid.*
- 21 *Lex.Philo.*, p. 1011; cf. p. 828.
- 22 J. F. Courtine, *op.cit.*, PUF, 1990, p. 488.
- 23 J.-F. Courtine, *op.cit.*, p. 412.
- 24 D. Kambouchner, *L'Homme des passions*, Albin Michel, 1995, t. II, p. 311.
- 25 J.-R. Armogath & J.-L. Marion, *Index des Regulae ad directionem ingenii de René Descartes*, Ateneo Roma, 1976.
- 26 « quia facillima erat & simplex / qu'elle était très facile et simple » (René Descartes, *Règles utiles et claires pour la direction de l'esprit en la recherche de la vérité*, Traduction selon le lexique cartésien, et annotation conceptuelle, par J.-L. Marion, Nijhoff, 1977, p. 14)
- 27 « ad generalem quamdam Matheseos investigationem » これに対するブランシュヴィック (J. Brunschwig) の訳は、「à une sorte d'investigation générale de la mathématique » (Descartes, *Œuvres philosophiques (1618-1637)*, t. I, Édition de F. Alquié, Garnier, 1963, p. 97) である。一方、マリオンは« à la recherche d'une certaine Mathesis générale » (*op.cit.*, p. 15) と訳している。
- 28 この次の一節、つまり« non minori jure, quam Geometria ipsa, Mathematicæ vocarentur »について読み方は定まっていはいないようである。AT版はここには何が欠けている、つまりは« vocarentur »の主語が欠けている、それはたとえば« omnes ou cæteræ disciplinæ ? »か、とする (AT. X, p. 377, b.)。Brunschwigもほぼ同様である (*op.cit.*, p. 98, n. 1)。マリオンはクラブリの説を紹介する。クラブリは« disciplinæ »が了解済みのこととして省略されているとする (René Descartes, *Regulae ad directionem ingenii*, Texte critique établi par Giovanni Crapulli avec la version Hollandaise du XVII<sup>ème</sup> siècle, Nijhoff, 1966, p. 86, n. 13。その場合にクラブリはクラヴィウス (Clavius) からの引用を使用している。「数学的諸学問 Mathematicæ disciplinæ」という表現である。そう解すると、「幾何学そのものに劣らず数学も、数学的諸学問と呼ばれる権利をもつ」ということになりそうである)。これに続いてマリオンは「デカルトの推論」の流れを記した後に、『規則論』における「マテーシス」と「数学 Mathematica」の用例を分析する。そして両者が「同意語」ではないことを明らかにし、「結局のところ、マテーシスは個別的な学として数学を含む」とする (J.-L. Marion, *op.cit.*, pp. 156-157)。このことは「普遍のマテーシス」との関連でも問われることである。しかし、「quam Geometria ipsa, Mathematicæ vocarentur」と「数学」が複数形になっていることの可能性について上述の研究者達は問うてはいない

ようである。

- 29 この後に次の表現が続く。« adeo ut deinceps me posse existimem paulo altiores scientias non praematura diligentia tractare. » (AT. X, p. 379) 「そのようにしてそれ以降は熟し切った慎重さによって私はもっと高度の学知を論じることができると看做している」。『デカルト著作集』[4] 白水社一九九三年はscientias (pl.)を「学問」と訳し(二九頁)、註においてその学問は「物理学を指す」としている(一二三頁(12))が、それは誤りである。知識を高めることができるということが言われていると解される。
- 30 René Descartes, *Œuvres complètes*, sous la direction de J.-M. Beyssade et D. Kambouchner, t. III, Gallimard, 2009, p.81 / AT.VI, p. 1.
- 31 村上勝三『デカルト形而上学の成立』講談社学術文庫2012年、「第二部第三章」参照。
- 32 G.W. Leibniz, *Theoria motus abstracti seu Rationes motuum universales, a sensu & phaenomenis independentes* (A VI, 2, pp. 258-276).
- 33 G.W. Leibniz, *Theoria motus concreti, seu Hypothesis de rationibus phaenomenorum nostri Orbis* (A VI, 2, p. 248).
- 34 Cf. G. W. Leibniz, *La réforme de la dynamique*, De corporum concursu (1678) et autres textes inédits, éd. M. Fichant, J. Vrin, 1994, pp. 33-34.
- 35 F. de Buzon, *op. cit.*, pp. 303-320.
- 36 拙稿「デカルトと近代形而上学」(講談社選書メチエ『西洋哲学史』2012年、第三卷所収)参照。
- 37 F. de Buzon, *op.cit.*, p. 320.
- 38 AT. V, p. 160 : DESCARTES, *L'entretien avec Burman*, Édition, et annotation, par J.-M. Beyssade, PUF, 1981, p. 73.
- 39 F. de Buzon, *op. cit.*, p. 310.
- 40 AT. V, p. 160 / Beyssade, p. 73.
- 41 拙著『感覚する人とその物理学』知泉書館2009年、129頁から130頁参照。
- 42 拙著『数学あるいは存在の重み』知泉書館2005年、29頁から30頁参照。
- 43 前掲書59頁から64頁参照。
- 44 Pierre Gassendi, *Disquisitio metaphysicæ*, texte établi, traduit et annoté par Bernard Rochot, 1962, J. Vrin, p. 525 sqq.

#### 基礎文献および略号

- AT. : *Œuvres de Descartes*, publiées par Charles Adam & Paul Tannery, Nouvelle présentation, Vrin, 1964-1973.
- BG. : René Descartes, *Tutte le Letterere* 1619-1650, A cura di Giulia Belgioioso, Bompiani, 2005.
- A. : Gottfried Wilhelm Leibniz, *Sämtliche Schriften und Briefe*, Deutsche Akademie der Wissenschaften. Darmstadt-Berlin : Akademie Verlag (1923-).
- GP. : Gottfried Wilhelm Leibniz, *Die philosophischen Schriften von Gottfried Wilhelm Leibniz*, éd. par C.J. Gerhardt, Olms 1961.

#### 文献表

- J.-R. Armogath & J.-L. Marion, *Index des Regulae ad directionem ingenii de René Descartes*, Ateneo Roma, 1976.
- F. de Buzon, La *mathesis* des *Principia* : remarques sur II, 64, dans J.-R. Armogathe, G. Belgioioso, *Principia Philosophiae* (1644-1994), Naples, Vivarium, 1996.
- J. F. Courtine, *Suarez et le système de la métaphysique*, PUF, 1990.
- G. Crapulli, « *Mathesis universalis* ». *Genesi di una idea nel XVI secolo*, Dell'Ateneo, 1969.
- R. Descartes, *Œuvres complètes*, sous la direction de J.-M. Beyssade et D. Kambouchner, t. III, Gallimard, 2009.
- R. Descartes, *Œuvres philosophiques (1618-1637)*, t. I, Édition de F. Alquié, Garnier, 1963.
- R. Descartes, *Regulae ad directionem ingenii*, Texte critique établi par Giovanni Crapulli avec la version Hollandaise du XVII<sup>ème</sup> siècle, Nijhoff, 1966.
- R. Descartes, *Règles utiles et claires pour la direction de l'esprit en la recherche de la vérité*, Traduction selon le lexique cartésien, et annotation conceptuelle, par J.-L. Marion, Nijhoff, 1977.
- R. Descartes, *L'entretien avec Burman*, Édition, et annotation, par J.-M. Beyssade, PUF, 1981.
- P. Gassendi, *Disquisitio metaphysicæ*, texte éabli, traduit et annoté par Bernard Rochot, Vrin, 1962.
- M. Fichant, G. W. Leibniz, *La réforme de la dynamique*, textes inédits, Vrin, 1994.

- R. Goclenius, *Lexicon philosophicum*, Francfort, 1613/ Marburg, 1615 / Olms, 1980.
- D. Kambouchner, *L'Homme des passions*, Albin Michel, 1995.
- J.-L. Marion, *Sur le prisme métaphysique de Descartes*, PUF, 1986.
- 村上勝三『数学あるいは存在の重み』知泉書館2005年
- 村上勝三『感覚する人とその物理学』知泉書館2009年
- 村上勝三「デカルトと近代形而上学」(講談社選書メチエ『西洋哲学史』2012年、第三卷所収)
- 村上勝三『デカルト形而上学の成立』講談社学術文庫2012年
- D. Rabouin, *Mathesis universalis : L'idée de « mathématique universelle » d'Aristote à Descartes*, PUF, 2009.